

塗りこめた声



塗りこめた声

曾野綾子



集英社版

塗りこめた声

昭和三十六年一月十日 初版発行
昭和三十六年七月二十日 三版発行

定価 二八〇円

著者 曾野綾子

発行者 陶山巖

印刷者 柳川太郎

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二ノ三
電話 東京(301) 三二〇一番
振替 東京 一五六五三番

乱丁、落丁のものは本社でお取替いたします

塗
り
こ
め
た
声

登場人物

北上 恭一 CBA (中央放送協会) ドラマ

班員

徳重 伝 CBA ドラマ班長 北上の上役

興津 憲司 CBA ドラマ班員 北上の先輩

神部 和一 CBA 音楽班員

小田 四郎 CBA クイズ班員

菅 義人 CBA ドラマ班員

下村 嘉雄 CBA ドラマ班員

永井 順吉 CBA ドラマ班員

木戸 一郎 CBA 婦人少年部員

蓮沼三樹三郎 元CBA理事 精光電気株式会社相談役

玉木義太郎 放送記者

田中 勇吉 CBA 守衛主任

土肥 登 CBA 技術研究所員

左近士陽子 バイオリニスト 中央放送交響

楽団員 興津の婚約者

稲田 早苗 タレント志願者

田村 敬子 早苗の学校友達 蓮沼の二号

川上 秋夫 田村敬子のボーイ・フレンド

浅野 啓太 芝アバートの管理人

落合ミツ子 銀座のバー「卍」のマダム

西野 常治 中山競馬場 町田厩舎の馬丁

鹿内 刑事 プロデューサー殺し事件の担当

刑事

装 幀

赤 穴 宏

第一章

君ほどの想像力と冷静な判断があれば、かならず成功するよ。ひとつ警察を出しぬいて、世間をあつといわせてやろうじやないか。

ベントリ

北上恭一は汽車が東京に近づくにつれて、或る興奮のために落ちついて坐つていられないような気持だった。彼は今四年ぶりに東京の土を踏むのである。北海道の北見に流されてから満四年、五年目の夏によく彼は東京へ呼び返されたのだ。

彼は朝五時に目をさました。二等寝台の客は、まだ誰も起きてはいない。彼は立つて行つて通路から関東平野の朝を見た。懐かしさが胸にわきたつた。空は朝もやに霞んでいる。陽がのぼれば暑そうだった。その暑さが又、彼には懐かしかった。コンクリートで出来た建物とその中につめこまれている人間の、厳しい緊張感をと

なつた都会人の汗の匂いにすら、彼は飢えているような気がした。

中央放送協会(CBA)。全国に三一五のネット局を持ち、出力総計一〇二〇・三キロワットを以てNHKと共に全日本の空を電波で覆っている。電波のある限り、文化の及ばぬところはない。

北見はいわばCBAの最北端の守りであつた。僻地に行けば行くほど、電波による文化伝達の使命はますますばりである。

それを自覚しない訳ではない。しかし誰がその役を買つてでるか、ということは極めて、人間的な問題であつた。抽象的には大切なことだということとはわかり切つていても、そうした一般的な命題は、自分ではなく、他人の身の上としてみた時だけに、人間はようやく正当な判断を下しているものらしい。

常に誰かが、そういう文化果つる所へ行かねばならぬのであつた。誰かがそれをやればいいのだ。しかし正直に言つて北上恭一は自分が北見へ行つてくれ、と言われた時、或る種のショックを免れなかつた。

「困つたことになつた。君に北見へ行つてくれんか、と言うのだ」

北上の直属上官である、ドラマ班の班長の徳重はその

時、当惑を顔一ぱいに見せながらそう言った。北上は勿論、兵役の経験はなかつたけれど、話にきいていた特攻隊のくじをひきあてたような気がした。彼の顔には血がのぼつて来た。

「変にカンぐらなくてくれたまえ。少くとも僕一人に限る限り、君とはまだ短いときあいだけれど、君の成績に不満を持つているようなことはない。只、誰かが行かなければならないんだ。誰かが……。困つたことになつた」

徳重つとむ伝は労働者のような大きな手で本当に当惑したように自分の首筋を撫でながら言った。

「誰かに行つてもらわなければならぬとすると、君はまあ健康だし、家族も御両親が若いからというのでね」

つまり、自分には体がきくという以外にとりえはないのだ、と北上は思つた。彼は照れて微笑した。北上は徳重を信頼していた。徳重は後輩を育てる気のある人間だつた。努力家でもある。太つて汗かきで気短かで、そのために時々なることはあつたが、人間は悪くなかつた。

「いいです。行きます」

「そうか行つてくれるか」

徳重の眼の中に温いいたわりの色があつた。

徳重のデスクの前を去る時、何か自分は大変軽率なことをしてかしてしまつたのではないか、という思いが、北上の心をかすめて通つた。しかし、大したことはない。大学を出て入つた新米プロデューサーは、大てい一、二年か、長ければ三、四年ドサ廻りをさせられることになつてゐる。運がよければ横浜、名古屋、或いは福岡、広島といった賑やかな所へ行ける。しかし誰かが北見へ行かなければならないのだ……徳重が言つたように、誰かが……。

北上は自分の若い日を三、四年、北海道で費すことを別にして悲劇的なことは思わなかつた。同じ班にゐる大学も先輩のプロデューサーの興津憲司けんじが、

「おい、どうだつた？」

と尋ねた時も、

「北見行きでした」

と素直に答えられた。

「ほんとか？」

「そうなんです」

「貧乏くじをひきやがつた」

興津は軽く舌うちをして、

「何なら俺が交渉して来てやろうか」

「いいですよ。誰かが行かないやならないんだから」

北上は相手をおしとどめて、ふとその科白は、早くも自分に言いよかすために必要な殺し文句になつてゐることに気がついた。彼は興津のちぢれ毛の下の悪気のない目を見ながら、

「一つだけお願いがあるんです」

「何だ？」

「僕が北見へ流されてるつてことを、忘れないで下さい」

「覚えてやるさ」

「僕はもともと筆不精だし、派手な性格じやないから、北見へ行つたら興津さんにハガキ一本出さないかも知れない。そうすると、僕が北見で生きてるつてことを覚えててくれるのは親だけということになつちまいます」

「安心しろ、折があつたら、必らず君を帰すように運動してやるよ」

「すみません。興津さんと、それから徳重さんだけを頼りに僕は北見へ行きます」

その時は北上はまだ幸福だつた。

それから二日ほど経つた時、北上は自分の北見行きが、決して徳重が言つたように誰かが行かねばならないから、などという簡単な理由ではないらしい、ということ

とを耳にした。

それより二ヵ月ほど前のことである。CBAでは、年四回、局会が開かれて班長、課長、部長、局長まで同席のもとに全プロデューサーが集つて、日頃仕事の運行の上でさまざまな問題になつてゐる点を述べ合う会が開かれるが、そこで彼は計らずも或る発言をすることになつたのである。それは、折角、金を出して中央放送局が育成している、中央放送劇団から育つたタレントを、局側があまり積極的に使おうとしない、という点を指摘したものだつた。一般の人々が映画俳優として知つてゐるスターの中には中劇（中央放送劇団）出身の者がかなりいた。いわばCBAは、金をかけて作り上げたタレントを、出来上つたところでむぎむぎと、よそにかつばらわれるというようなことを平気で見すごして来ているのである。そういう、鷹揚さおつようさというか、ずさんなやり方が、いわば通信官僚の巣窟うすくわといわれ、政府の上意下達局と噂されるCBAの大きな特徴であつた。勿論、映画とテレビ・ラジオの間には微妙な関係があり、どちらも依存し合つてゐるようなところがなくもない。純粹にテレビ乃至はラジオ畑から出て来てそこに留つてゐるのは、どうしても弱いのである。

言葉に氣をつけて言つていたので、問題の点ははつき

りしなかつたが、勿論北上はそうした漠然とした事に文句をつけているのではなかつた。つけ加えておくなら、その日、確かに北上は虫の居所が悪かつた。彼は中劇の六期生の連中が、必要以上に冷遇されていることを指摘したかつたのだ。六期生には、少くとも齋田和子、及川鶴代、津田のぶ、という三人の有能なタレントがいる。歌つて踊れて芝居の出来る連中である。しかし彼女らは他のタレントから比べるといい企画に入らないのであつた。齋田と及川は子供番組に辛うじて活躍して、子供たちの間に人気があるだけだつた。津田は最近では見切りをつけて民放のコマーシャルの歌やふきかえにもぐりて出演していた。

何故かといえ、そこは微妙な問題なのだが、六期生の中には杉田光子という新聞ボスの娘がいる。六期生の中におこつたことは、何事によらず、杉田光子から外部へ筒抜けになるのであつた。筒抜けになることによつて困る人間は、又多種多様だつた。勿論問題にしていない人間の方が絶対多数ではあつたが、何となくそれを煙つたく思う人間があるとすれば、大勢の人間の共同作業によつて作られていく番組では、反対する者が少しでも少ないタレントを選ぶ方が無難ということになつてくるのである。

最も単純なものは、六期生の娘には手を出すな、という考え方であつた。プロデューサーとタレントの間に真面目な愛情が芽生えることもある筈なのに、人の噂にのぼりかつ長く記憶されるのは、少数者の、特異な行動ばかりである。おしかけタレントが菓子折の底に実弾をぶちこんで部屋の前にはりこんでいたり、ラフレターと称するものの中のレターペーパーは白紙で中に千円札が何枚か代りに入つていふということも、それほど珍らしいことではない。しかしプロデューサーというものはおしうりタレントと温泉マークに泊りに行くものだ、という巷間の一部の消息通と自称する人々が公言しているのは極めて片寄つたものだと言わねばならない。だから六期生には手を出すな、とは言つても、それはすべてのプロデューサーの考えではなかつた。只六期生を使おうとすると、上からいつの間にかその名前がけずられて来ることが多かつた。勿論理由は臆測の範囲を出なかつたがそういうことが何回か度重なる、企画に彼女らの名前を入れてみるような無駄なことは初めからしない、という人間が多くなる。もつとも形こそ違え、このような不合理は、どんな社会にもいつも必ずついてまわるものであつた。

とにかくその時、北上の発言は一応肯定され、うやむ

やのうちに流された。会議の席では一応何か言わないといけないのだが、上の人間に対するたてつき方にもツボがあるのである。或る者はにやにやしていたし、或る者は眼は開けていたが耳は眠つている、という例の集會時特有の無表情な顔つきをしていた。散會になつた後、興津だけが、

「おい、あれ以上、何か言うなよ」

と一言注意しただけだつた。

北見に流されたのは、それがたたつていゝといふのである。北上は今度こそ本当のショックを味つた。まさか、とは思つたが、そうなる、「誰かが行かねばならぬ」といふ徳重の言葉も嘘つばちに聞えた。どうして他の人間ではなくて自分が選ばれたのか。

後味の悪い思いで、北見へたつ時、二度と再び東京に歸つて来られないのではないか、という気がした。地方の小都市を決して侮蔑する気はない。むしろこまやかな人情というものがもし残つていゝとすれば、そういう場所と違ひない、といふ答えは心の中に出ていたが、東京で生まれ、東京で育つた神経には、やはり東京以外は住みにくいのである。

北見へ来て翌年の秋だつたか、とにかくまだ雪の来ない前であつた。北上は、北見の町はずれを、ぶらついて

いた。荒涼としたあたりの風景だつた。一羽のカラスが、北上の前方の道に下りて、じつと彼の方を見つめていた。北上は両腕をふりまわし「ウシ、ウシ！」とどなつた。それでもカラスは平氣だつた。それどころか、北上が近づくとつれて、カラスは彼に向かつて威嚇的な啼き声をあげ黒い羽をひろげて身がまえた。

こんなところにぐずぐずしていたら、今にカラスにくわれてしまふ、と北上はその時本氣でそう思つた。放送局なんかやめてしまえばいいんだ。そうすれば、明日にも東京へ歸れる。

彼がそこで踏みとどまつたのは、甚だ浪花節的だつたと彼自身も自覺しているが、父母の顔を目に思い泛べたからであつた。父母は律氣な人たちだつた。辛くとも、まつとうに任務をつとめ上げて来ることを期待する人たちだつた。

彼はそこで遂に四年辛抱した。二度目の危機は、今年の春に來た。年度末の移動を、今年こそは、と当てにしていたのに、東京へ歸れる氣配はなかつた。興津はつてのある毎に、北上へ伝言をして、何とか早く歸れるように工作するから、元氣で頑張れ、といつてよこしていたのに、四月移動の際に、北上には何の朗報もないことについては、何とも言つて來ない。

北上は、鬼界ヶ島の俊寛しゅんかんのような気持だつた。明日こそは東京へ帰つてやろうと思つたことも何度かあつた。しかしその度に、受持ちの小さな番組のため動きがつかなくなつた。CBA朝七時四十五分からの「朝の談話室」という時間は、週一回だけローカル放送に切りかえられ、地方名士の御登場を願うことになる。三ヵ月に一度位、それが北上の受持としてまわつてくるのだが、何もかもなげすめて東京へ帰つてやろうと思つたたびに、丁度その順番に當つていたりするのである。

半ばあきらめかけていたところへ、六月末突如として大幅の人事異動があつた。教育テレビ発足にともない、あちこち手不足だつたり、人員の配分がうまく行つていないところがあつたりしたのを、この際新館落成と共に部屋がえもして、すつかり新機構の体制をきめよう、というこゝらしかつた。北上は東京へ帰ることになつた。

北上恭一が勇躍北見を立つたのはこのような経緯があつたからである。彼は眠れなかつた。関東平野は既に東京である。二等寝台の最上段は暑くて空気がひどく乾いていたが、眠れないのはそのためではなく、興奮しているからだつた。両親の顔が泛んだ。その次に思い出されたのは興津だつた。興津がやはり、今度のことについては随分力になつてくれたのではないか、と北上は思つ

た。少くとも、興津は四年間、北上のことを忘れなかつた只一人の人間だつた。何よりもまず礼を言わなきゃ、と北上は思つた。それから、彼は、汽車の通路に誰もいないのを見ますと、いつか北見の町はずれでカラスに向つてしたように腕をふりまわした。ありがたいことに今、彼が手をふり上げたのはカラスに対してではなかつた。それは東京で待つてゐる仕事に対する新たな勇気の湧きあがるのを示したものだつた。

北上が興津に会つたのは、その翌日であつた。「やつと帰つて来ました。いろいろお世話になりました。」

興津は改つて挨拶をされるとはずかしそうな顔をした。

「飯を食ひに行こうや」

と彼は誘つた。食堂は六階である。飯はうまくなかつた。腹が減つてぶつ倒れそうになつて六階までかけ上るとその途端に腹が一ぱいになる位まずいというのが、口の悪い興津の表現であつた。

食堂には、懐かしい顔がいくつかあつた。今日は夕方から異動に関する歓迎歓送パーティがある。

「北ちゃん、太つたな」

と相変らず威勢の悪い顔でつぶれたような笑い方をしているのが、音楽班の神部和一である。神部は、長便所で有名であつた。本当に用のある時のみならず、何か案をねる場合も便所にひっこむという噂がある。北上は四年ぶりにそんなことを思い出した。

神部と同じ臭い仲といわれるクイズ班の小田四郎が偶然その隣にいた。

小田は手洗所で大きなひとり言を言つたり、奇声を発したりするので有名だつた。

「おう、北ちゃん。北見はどうだつた」

小田は隣のテーブルから声をかけた。

「どうもなかつたよ」

「どうもないつてことはないだろう」

「北見の空は青かつた」

興津は顔を上げると、

「そんなもんだらうな」

とあいづちをうつた。それから彼は手にしたマヨネーズの壘を食卓の上のせて蓋をあげながら、傍の北上や傍にいた連中に、

「サラダにかけて食べないか、ちつとは味がよくなるよ」

とすすめた。北上は興津のその動作を興味深く見守つ

た。久しぶりに会う人間のすべてが新鮮にみえた、ということもあつた。

「興津さん、いつもこんなもの御持参なんですか」

「いやあ、俺がこんな面倒のいいことじゃないよ。これは只、ちよつとさつきかつばらつて来ただけなんだ」

それから興津は声をひそめた。

「実はね、もうこんなまずい飯を食うのもあきたから、最近、結婚しようかと思つてるんだ」

「そうですか」

思いなしか、興津のちぢれ毛の髪も薄くなつたように北上は思つた。

その時、マヨネーズの壘をまわしていた連中の一人が言つた。

「おや、この壘の底に何かあらあ」

「そうか、どれどれ」

他の一人も箸でかきさがした。

「ちよつと俺に貸してみろ」

興津は何も言わずに、箸でマヨネーズの底の方をさぐつた。

「丸いものだな、異物が混入するにしてもすこい奴だぜ。早速新聞に物を申してやつた方がいいよ」

発見者が言つた。

その時、「興津さん電話！」と誰かがどなつた。興津はランチの最後の一口をのみこむとマヨネーズの壺を握り、慌しく北上に言つた。

「一足先に行くよ」

北上は食事を続けた。この慌しさこそ北上が飢えていたものだつた。忙しさ自身はいやだつたが、この緊張度こそ、まぎれもない東京の空気であつた。

それは正確に言ふと、水曜の昼のことである。そして北上にとつては第一の恩人である興津憲司が、閉め切つた第六スタジオの中で死んで発見されたのは、翌週の木曜の朝のこと、事件は奇しくも丁度一週間目の、同じ水曜におこつたのであつた。

第二章

鍵はただ形式だけのものですね。便利
なように、ドアのそばの小さな釘に
かけてある。

ヴァン・ダイン

事件の朝。

北上恭一は、午前十時少しすぎに、家の電話で叩きお
こされた。

「北上君？ 僕だ」

意外にも、それは班長の徳重の声であつた。

「は」

「すぐ来てくれないか、興津君が死んだ」

「は!？」

眼が覚めるより早く、北上は息が止りそうに感じた。

「自動車事故、ですか？」

「そうではない。警察が来てる。一刻も早く来てくれな
いか」

慎重な徳重は刺激的な言葉を一切避けるようにしては
いたが、そのために却つて北上は容易ならぬ予感に唇が
乾くのを感じた。

ネクタイも締めずに、北上が局までタクシーを飛ばし
たのは、それから三十分と経つていなかつただろう。既
に正面玄関には警察の連中の車がたむろしており、放送
局というところではあまり見かけない種類の風車をした
人間が何人か出たり入つたりしていた。

午前十時の放送局は、普段ならまだそれほど人間が集
つてゐる時間ではないが、その日に限つて一種異様な落
ちつかない究気が早くもあたりに流れているのを北上は
感じた。彼はエレベーターを待つのもどかしかつたの
で、三階まで階段をかけ上り、演劇課の部屋に入ろうと
して、同じく急ぎ足に出て行くところだつたプロデュー
サーの菅義人とすれ違つた。

「どうしたんだ」

舌が乾いていて、北上の言葉はもつれた。

「興津が殺られてたのさ。六スタ（第六スタジオ）ん中
で」

菅は自分の後頭部を後から拳骨で殴るまねをした。

「いつ？」

「さあ、今朝、守衛が見つけたんだ」

それから昔はちよつとずるような笑いを泛べながら北上に言つた。

「おい北ちゃん、昨日からのアリバイあるか？」

「——」

「ステチュワードス殺しの神父みたいにき、自分の部屋で寝ただけじゃアリバイにないんだ。その点じゃ僕みたいなノンベエはたまにいいこともあるね。昨夜は朝の四時まで飲み通して、それから常盤館にしげこんじやつた」

北上は昔のおしやべりをそれ以上きいていなかった。部屋の中は非常に落ちつかなくつた。電話が鳴り、ひとがやたらに出入りして、奥の方には、更にはつきりと目につくように五六人の人間が塊つていた。徳重はそこにいた。北上の姿を認めると、徳重は頷き、泳ぐような恰好で近寄つて来る北上をいたわるように見た。

「これが興津氏の補佐的な役をしていた北上君です。北上君、こちらが麻布署の鹿内刑事。こちらが……」

北上は夢中で頭を下げた。鹿内刑事と紹介されたのは、銀ぶちの女性的な眼鏡をかけ、ちぢれ毛で色が黒く、しかも、外人のように背の高い男だつた。他に制服の警官もいた。

興津憲司は、ラジオ第六スタジオの中で何者かに後頭部を強打されて死んでいた。凶器はスタジオ内にあつた古い鉄の棒であり、発見者は、田中勇吉という守衛主任であつた。彼は朝九時すぎに、スタジオの大戸の海老錠を開けて興津が倒れているのを発見した。彼は最初まさか興津が死んでいるとは思わなかつた。彼は、

「どうしたんですか」

と、どなつてみてから、甚だ奇異の感にうたれた。昨夜九時すぎに、六スタの戸の海老錠を閉めたのは自分である。それから今まで誰もこの部屋には入つて来られなかつた筈だ。

田中勇吉は当年五十五歳であつた。彼はこれで二十五年間も守衛を続けているので、薄気味悪いことには馴れていた。

倒れているのは演劇の興津さんらしい、と気がついた時、彼は助けおこそうとした。しかし興津の肩にさわつた時、彼は背筋を氷のようなものが走るのを感じた。興津の服の下にある肉体は堅く材木のようにうであつた。田中はそれが死後硬直らしいということを咄嗟に悟つたために、数秒の間、脚がなえたように立つことが出来なかつた。

しかしその後にとつた彼の行動はさすがに沈着なもの

だつた。彼は肩にかけた革サックから非常用の携帯電話を壁のコンセントにつないで、守衛室を呼び出した。「六スタへ来てくれ、大いそぎだ。C B A 始つて以来の事件だ！」

中央放送局始つて以来、事実このような事件がおきたことはない。田中の頭は、もうそれを自覚する迄にさめていたが、電話を受けとつた相手は、

「どうしたんです。天皇陛下でも来たんですか」
とのんびりした声を出した。

「バカッ。演劇の興津さんが殺されてる！」

とり調べの麻布署の刑事たちが田中に確かめた最も重要な点は、鍵がかつたままになつていた六スタの中で人間が死んでいた、という事であつた。田中勇吉は、昨夜六スタの鍵をかけたことについて極めて明確な記憶を持つていた。守衛たちはC B A の建物を三つの部分に分けて、それぞれ一時間ごとに、巡回に出発する仕組みである。この巡回は途中でさぼつたり手をぬいたりしないように、廊下の曲り角のキイ・ポイントになる所に、鍵をさしこんでまわすような装置がしてある。当番の守衛は確かにそこを通つたという証拠に持参の鍵をさしこんでまわすと、守衛室に一見してそれとわかるような豆電球がつく。いわばこの操作は、見廻りの厳密さと、万が

一、巡視の守衛に不測の事態がおこつた時、(例えば物かげに隠れていた兇悪な人間に襲われるというような時)一番最後には広い局内のどこかの地点にいたかを確かめられるようになってゐる。つまり彼らは五分位の間隔で、自分の立つてゐる場所を守衛室に通報して歩いてゐる訳で、彼らはこれを鍵まわしと呼んでゐた。

田中勇吉が昨夜に限つて自分が巡視に出たのは、その時間に歩くべき若いものが、家からの電話で、女房が難産だから帰つて来てくれ、という知らせにとんで行つてしまつたからである。

今時の若い者は家庭のことばかり大事にしやがる、俺の若い時なんぞ、女房がお産をしかかつていても、「しつかりいい子を生めよ」と言いおいてちやんと出て来たもんだ。そうは思いながら、田中勇吉は、やつぱり妻を愛するというのはいいものだ、と考へてゐた。只夏だというのに、両手の神経痛が痛むのは困りものだつた。代りに鍵まわしに歩くにしても、手が痛むのではやり切れない。

彼は自分の神経痛をC B A が冷房装置をとりつけた故だと考へてゐた。局側はテレビのライトが暑いとか何とかいうけれど、戦前は、

「エー、一席お伺い申しあげます」

なんて熱演している高座の師匠が、実は禪一本で頑張っていたなんてことはざらだつた。テレビ発足当時は、ライトが悪くて、志ん生師匠の黒紋付がぶすぶす燃え出したり、向い合わせにおいたライトの間にさつまいもを置いておくと、ほんのりといひ焼芋になつたりしたけれど、今はそんなこともない。局の若い者をみていると冷房が出来てから、めつきり、早く出勤してくるようにはなつたけれど、その代り、出来るだけ外へは出て行きたくないと考えているような不埒な気分も出て来たように田中勇吉は思つた。

しかしとにかく田中勇吉は夜九時に、自ら守衛室を出た。九時の巡視はまだそれほど用事は多くない。例えば深夜十二時に守衛室を出発する場合は、各階の湯わかしの火が完全に消えているかどうかを見確かめる、という特別の任務があるが、九時頃ではまず各部屋には人が残つてゐるし、するべき仕事としては、スタジオの戸にかけられた、業務課が出しているスタジオ使用表というのを見て、その日のスケジュールがすつかり済んでいる場合には、火の気がないかを確かめ、電燈を消して、スタジオの大戸に錠をかけるのが主である。

もつともその他にも田中勇吉の眼にふれたものは沢山あつた。本館三階東側の廊下で、ロッカーが一つ、消火

栓の口をふさいでいたので、彼はそれを臨へどけねばならなかつた。いわゆる放置物件というのは数限りない。牛乳環、そばやの井から、折りたたみ式の椅子に至るまで、凡そ思いつく以上の不思議なものが、あるべきではないところがつてゐた。この折りたたみ式の椅子の裏には、「電源室」とその所属している部屋の名前がはつきり書いてある。電源は別館の一番奥の地下二階にあり、距離的にみても、どうしても半キロは離れている。毎度のことながら、田中勇吉はどうしてもこの椅子が、半キロも離れたこんなところに転つてゐるのか、椅子ぐらいつどこにでもあるだろうに誰が辛抱強くここ迄この椅子を運んでくるのか、何の目的なのか、さつぱり訳がわからないのであつた。

「それで、錠は確かにかけたんだな」

刑事は田中勇吉に尋ねた。田中は慎重な男だつたので、ちよつと考えてから、

「確かにかけました」

と言つた。

「中に誰もおらなかつたかね」

「私も誰か中におるといふかと思ひまして、大きな声で呼んでみました。楽器は出してありませんでしたし、中はしんとしてゐました。副調整室のほうの錠は、